

# シンデレラ

アンドルー・ラング



おとこ おとこ おんな に

ナレーターA：むかしむかし、ひとりの男のひとがいました。男のひとはある女のひとと二かいめのけっこんをしたのですが、その女のひとは、いつもえらそうにして、お高くとまっているひとでした。女のひとにしても二かいめのけっこんでして、前のだんなさんとのあいだに、ふたりのむすめをもうけていました。そのむすめたちときたら気まぐれで、ほんとうに何から何まで、その女のひとにそっくりでした。同じように男のひとも、前のおくさんとのあいだに、おさないむすめがいました。それはそれはだれよりもおもいやりがあって、お母さんゆずりのやさしい心をもった少女で、せかいでいちばんうつくしい心のもちぬしといってもいいくらいでした。

けっこん式がとりおこなわれてまもなく、ママ母はその本性をあらわしはじめました。かわいらしくて、人がよい、この少女がいて、じぶんのむすめがなんともみじめにおもわれるので、ひどくじゃまにおもえました。そこで少女を、とびきりみじめなしごとにつかせようとおもいました。お皿をじゃぶじゃぶ洗わせ、テーブルをごしごしふかせ、じぶんやむすめたちのへやをめいっぱいそうじさせました。へやまでみじめにしようと、せまくてくらい、やねうらべやにおいやってしまいました。ベッドもなく、そこにはわらがどさりとおいてあるだけでした。でもじぶんのむすめたちには、それぞれ、きらきらのきれいなへやにすまわせ、ベッドも今はやりのベッド、おいてあるかがみはあたまからつまさきまでうつせるほどの、それはそれは大きなものでした。

かわいそうに、少女はがまんするしかありませんでした。たとえお父さんにいったところで、いそがしいといって、とりあってくれないからです。きいてくれたとしても、お父さんはあの女のひとのいいなりですから、どうにもなりません。

少女はしごとがおわると、いつもかまどのあるこべやへ行きました。そこはもえがらと灰でいっぱい、いつもその中ですわっていました。そのためみんな少女を『灰むすめ』とよびましたが、ちょっとべんきょうのできる下の方の姉が、もうすこしきれいな名まえでよぼうと、『灰かぶりひめ』といういみの、『シンデレラ』という名まえをつけました。

シンデレラは灰だらけで、きたなくみえたかもしれませんが、ほんとうの顔は姉たちより百 ばい  
もりりしかったのです。姉たちがいくらきれいなドレスをきても、かないっこありません。

あるとき、王子さまがダンス・パーティをひらくことになりました。お金もちの人や、ゆうめい  
な人など、いろいろな人がまねかれました。シンデレラのいえの、ふたりの姉も、服がきれいでひと  
きわ目立っていたので、もちろん声がかかりました。ふたりはおよろこびで、さっそくドレスは  
どれにしようとか、ペチコートはどんなのにしようとか、あたまに何をかざろうとか、あれこれな  
やみはじめました。けれども、シンデレラにしてみれば、めんどうなことがひとつふえただけでし  
た。というのも、姉たちのはだぎをアイロンがけしなくちゃならないし、フリルをつけなくちゃい  
けない、ぜんぶシンデレラのしごとなので。それにひきかえ姉たちは、朝から夜まで、どう  
おめかしすればいいかしらとしゃべるだけでした。

うえ あね

上の姉がこういうのです。

姉A：「わたしとしては、フランスせいのふちかざりがついた赤いビロードの服がいいかなって思  
うのよ。」

ナレーターA：いっぽう、下の姉は、

姉B：「わたしは、お気に入りのペチコートをきたいんだけどね。でもそれだけじゃダメだから、  
ゴールドの花つきのお気に入りのケープね、あとダイヤモンドのむねかざりね、ねえ、これってふ  
つうは手に入らないものなのよ。」

ナレーターA：というしだいです。

それから、いしょうのあつかいの上手な女性にたのんで、ぴったりあうように、あたまかざりを  
ふたつなおしてもらったり、ド・ラ・ポシェのおじょうさんからは、赤いブラシとつけぼくろをも  
らったりしました。

シンデレラも服えらびによばれ、

姉A&姉B：どんなかっこうがいいかしら、

ナレーターA：とふたりにきかれました。じつは、シンデレラはとてもセンスがよくて、ふたりの  
きる服をいつもアドバイスしたり、あたまをきれいにかざったりしていたのです。だからふたりの  
姉は、こぞってシンデレラをよびました。

シンデレラが服をかざっていたときに、ふたりはいいました。

姉A：「シンデレラ、あなたもダンス・パーティに行きたくなくて？」

ナレーターA：しかしシンデレラは、かなしそうにほほえんで、いいました。

シンデレラ：「ごじょうだんを、お姉さま。わたくしが行くなんて、めっそうもありません。」

ナレーターA：そういうシンデレラに、ふたりはこうかえしました。

姉B：「『ああ、そのとおりだあね』。だって、シンデレラなんかがダンス・パーティにいたら、みんなのわらいものですものね。」

ナレーターA：シンデレラさえやらなければ、ふたりのあたまはへんてこりんになってしまうのに。でもシンデレラはやさしい子だったので、ふたりのあたまをかんぺきにあげました。

ふたりはうれしさのあまり、二日間なにも食べませんでした。それくらいうれしかったのです。また、からだをほそく、すらりと見せようと、ひもでむりやりしぼろうとして、たくさんひもをちぎってしまいました。そういうことをしたあげく、なんどもなんどもかがみのまえて、じぶんのすがたを見つめるのでした。

\*\*\*

ナレーターB：

ついに、たのしいその日がやってきました。ふたりはおしろへ出かけていきました。シンデレラは、とおざかっていくふたりを、じっと見つめていました。ふたりのすがたが見えなくなってしまうとき、シンデレラはとつぜんかなしくなって、なきくずれてしまいました。

そのとき、シンデレラのうばが、なっているシンデレラを見つけて、

乳母：どうしたの、

ナレーターB：とききました。

シンデレラ：「わたし、わたし、ほんとうは……」

ナレーターB：とシンデレラはそこから先がいえなくなってしまうました。なみだがつぎからつぎへと出てくるばかりで、ことばが出てこないのです。

そんなシンデレラを見ていた、このうば、じつは、ようせいのくに生まれの、まほうつかいだっただのです。

乳母：「おまえは、ダンス・パーティに行きたいとおもっている。ちがわないかい？」

ナレーターB：シンデレラは、

シンデレラ：「……はい。」

ナレーターB：とためいきまじりにこたえました。

うばは

うば  
乳母：「よろしい。」

ナレーターB：といい、シンデレラにむかって、はなしをつづけました。

うば  
乳母：「ほんのすこしのあいだでいいよ、いい子にしてな。そうすれば、なんとかしてやろうじゃないの。」

ナレーターB：それからうばは、シンデレラをへやにつれていき、いいました。

うば  
乳母：「にわに出てって、カボチャをもってきておくんな。」

ナレーターB：シンデレラはすぐに、はたけの中でいちばんおおきなカボチャをもぎって、うばのもとへもってきました。でもシンデレラは、このカボチャのどこをどうして、ダンス・パーティに行けるようになるのか、まったくおもいもつきませんでした。

うばはカボチャのなかみをぜんぶほじくりかえして、かたいそとがわだけにしました。そのあと、みじかいステッキでちよんとたたくと、カボチャはたちまち、大きくてりっぱなばししゃにかわってしまいました。金色で、きらきらかがやく、よっつのしゃりんがついたばししゃでした。

それから、うばは、ねずみとりのあるところへ行って、中をのぞきました。ハツカネズミがろっぴき、生きたまま引っかかっていた。シンデレラは、うばにいわれたので、ねずみとりの入り口をちょっとだけあけました。するとハツカネズミがぴょんぴょんといっぴきずつ出てきて、うばはネズミがぴょんと出てはステッキでたたき、ぴょんと出てはたたきをくりかえし、あっというまに、ろっぴきのハツカネズミは、ろくとうのウマにかわってしまいました。そこにいるのは、ハツカネズミみたいな、きれいな灰色のぶちがついた、りっぱなウマのいちだんだったのです。ただ、うんてんしゅがないので、ウマたちはおちつかない、といったかんじでした。

シンデレラはぴんときて、うばにいいました。

シンデレラ：「ということは、ぎょしゃがひつようなのでしょうか？ わたし、こんどはドブネズミのわなのところへ行って、ひっかかかっていないか見てきますわ。」

ナレーターB：うばはシンデレラにこういいました。

うば  
乳母：「ああ、そのとおりだあね。行って、しっかり見てくるんだよ。」

ナレーターB：シンデレラがわなをうばの<sup>なか</sup>ところにもってくと、中にはふとったドブネズミがさんびきいました。うばは、さんびきの中から、ヒゲがいちばんながい<sup>なか</sup>っぴきをえらび、ようせいのステッキでたたきました。すると、ドブネズミはたちまち、あかるい、でぶっちょのぎょしゃにかわってしまいました。こうていのヒゲをたくわえて、そのえらそうなことといたら、だれにもくらべようがありません。

つぎに、うばはシンデレラにこういいました。

うば  
乳母：「もういちど、にわへ<sup>い</sup>行っておくんな。ジョウロの<sup>い</sup>かげに、トカゲがろっぴきいるから、それをつかまえてくるんだよ。」

ナレーターB：シンデレラはすぐにつかまえてきました。うばは、トカゲたちをろくにんのめしつかいにかえてしまいました。ろくにんのめしつかいは、ばしゃのうしろにいそいでとびのりました。めしつかいは、<sup>きん</sup>金や<sup>ぎん</sup>銀でかざりたてたおしきせにみをつつみ、ずっとそればかりやって、もうなれっこだ<sup>い</sup>といたい<sup>い</sup>かのように、ばしゃのうしろにぴったりしがみついていた。

うばは、いちだんらくをつけて、シンデレラにいいました。

うば  
乳母：「ほおら、もうここには、ダンス・パーティ<sup>い</sup>に行くにはじゅうぶんな、ばしゃもおともも、そろったよ。ん、うれしくないのかい？」

シンデレラはぼかんとしていましたが、

シンデレラ：「あ……は、はい！」

ナレーターB：といいますと、あることに<sup>き</sup>気がつきました。

シンデレラ：「あの、でも、わたし、こんなきたない<sup>い</sup>ぼろでは、行けない……」

ナレーターB：そこで、うばはステッキでシンデレラの<sup>ふく</sup>服をたたきました。するとどうでしょう、みるみるうちに、シンデレラの服は<sup>ふく</sup>金や<sup>ぎん</sup>銀、<sup>ちい</sup>ほうせきなどをちりばめた、りっぱなドレスにかわってしまいました。そして、うばは、いっそくの小さなガラスのくつをシンデレラにあたえました。せかいのどんなものよりかわいらしい、すてきなくつでした。

こうして、シンデレラはすっかりおめかしして、ばしゃにのりこみました。けれども、うばはさいごに、シンデレラにあるちゅういをしました。

うば  
乳母：ダンス・パーティ<sup>じゅうに</sup>をたのしむのはいいけど、よなかの十二じをこえてはいけな<sup>い</sup>よ。もしちよっとでもすぎたら、ばしゃはカボチャに、ウマはハツカネズミに、ぎょしゃはドブネズミに、めしつかいはトカゲに、ドレスはぼろに、みんなみんなもともどってしまうよ、

ナレーターB：と。

シンデレラはうばに、

シンデレラ<sup>じゅうに</sup>：十二じまでにはダンス・パーティからかえってきます、

ナレーターB：とやくそくしました。それから、すぐさま、ばしやははしりだしました。シンデレラは、わきあがってくるよろこびを、かくしきれないでいました。

ナレーターB<sup>おうじ</sup>：王子さまは、だれもしらない、すてきなおひめさまがやって来たときいて、おむかえしようと、さっと出てきました。シンデレラがばしやからおりと、王子さまが手を取って、ダンス・パーティのかいじょうへ、あんないしてくれました。すると、かいじょうはしいんとしずまりかえって、みんなおどるのも、ヴァイオリンをひくのもわすれて、あたらしくやってきた、見知らぬ、ぜっせいのびじんをまえに、じいっと見つめることしかできませんでした。しばらくすると、ざわざわとみんなはさわぎだしました。

貴族A<sup>きぞく</sup>：「おい、あのひと、たいへんなびじんじゃのう。」

貴族B<sup>きぞく</sup>：「ねえ、あのひと、たいへんなびじんじゃねえ。」

ナレーターB<sup>おうとし</sup>：王さまは、もうお年でしたが、それでもシンデレラのうつくしさには、びっくりしてしまいました。そして、となりにいるおきさきさまに、

王さま<sup>おう</sup>：むかし、おまえをみたときも、あの少女のように、うつくしかったんだよ、

ナレーターB：とあまくささやかずにはいられませんでした。

かいじょうにいた女のひとはみんな、シンデレラの服やあたまかざりが、あまりにすばらしいので、つぎの日<sup>おんな</sup>にまねしてこようと、じっと見つめました。でも、それには、うばがあたえてくれたような、すばらしいそざいと、シンデレラのような、みごとなうでまえがみつようなのですけどね。

王子さま<sup>おうじ</sup>は、シンデレラを、パーティのしゅやくがすわるせきに、つれていきました。そして、

王子さま<sup>おうじ</sup>：いっしょにダンスをしましょう、

ナレーターB<sup>て</sup>：とフロアに手をひいていきました。みんながうっとりするほど、シンデレラのダンスはじょうずでした。おいしそうなおかし<sup>だ</sup>が出されたときも、王子さまはひと口もたべず、ずっとシンデレラ<sup>かお</sup>の顔を見つめていました。

シンデレラは姉たちのそば<sup>あね</sup>に行つてすわり、たいへんていねい<sup>い</sup>にあいさつをして、王子さまからもらった、オレンジやシトロン<sup>あね</sup>をわけてあげました。ふたりの姉はシンデレラだときづかず、とて

もびっくりしていました。

シンデレラがこうして、ふたりの姉あねをたのしませているうちに、十一じゅういちじ四十五よんじゅうごふんのかねがなりました。シンデレラはあわてて、みんなにおわかれのあいさつをしてから、いちもくさんに、かいじょうをあとにしました。

いえにかえると、シンデレラはいそいで、うばをさがしました。そして、おれいをいいました。あともうひとつ、シンデレラにはいわなきやならないことがありました。あしたも、ダンス・パーティいに行きたい、ということです。というのも、王子さまおうじが、

おうじ  
王子さま：あしたもぜひきてください、

ナレーターB：とってくれたからです。

シンデレラがダンス・パーティのことを、うばにうれしそうにはなしていたとき、ちょうどふたりの姉あねがげんかんのドアをノックしました。シンデレラははしって行って、ドアをあけました。

シンデレラ：「おそいおかえりでございますね。」

ナレーターBめ：と目をこすって、のびみをしながら、あくびまじりに、シンデレラはいいました。だれが見ても、いまおきたばかりにしか見えませんでした。でも、姉たちあねがでかけてから、シンデレラはいちどもねむいとおもったことはないのですけれど。

した あね  
下の姉あねがいました。

あね  
姉B：「もし、あなたがダンス・パーティにいたならば、いつときもたいくつすることはなかったでしょう！ ……なんてね。だって、きれいなおひめさまが、とつぜんあらわれたのよ。もう、みたことないくらい、びじんなの。すごくれいぎただしくて、わたしたちにオレンジとかシトロンとかくれたの。」

ナレーターB：シンデレラは、おもしろくないふりをしました。でもいちおう、

シンデレラ：おひめさまの名なまえってなんていうの、

ナレーターBあね：とききました。ふたりの姉は、

あね な し おうじ  
姉B：名まえは知らないけど、王子さまは、そのおひめさまにどきどきしていたわ、

ナレーターB：といいました。

あね おうじ な し  
姉A：王子さまなら、名まえを知るために、このくにだってあたえかねないわ、

ナレーターB：と。このときばかりは、シンデレラもほほえみました。

それから、こういいました。



シンデレラ：「とてもきれいな、おひめさまでしたのね。うらやましいかぎりですわ。わたしも、そのおひめさまがみたくなってきましたわ。ねえ、シャルロットお姉さま、お姉さまのいつもきている、あのきいろい服、かしてくださいませんか？」

ナレーターB：それにたいして、上の姉のシャルロットは、かんだかい声でいいました。

姉A「まあ、そうくるとおもったわ。あなたのような、うすぎたない灰むすめに、わたしの服をかせですって！ ばかにしてるわ！」

ナレーターB：シンデレラも、そういうへんじがくるとおもっていました。ぎゃくに、そういわれてうれしかったくらいです。だって、もし姉たちがおあそびで服をくれようものなら、シンデレラはみじめなきぶんでパーティに行くことになったからです。

\*\*\*

ナレーターC：

よくじつ、姉たちはダンス・パーティへ行きました。シンデレラも行きました。きのうのパーティのときより、もっとおめかししていきました。王子さまはずっとシンデレラのそばにいて、いつもやさしいことばをささやいてくれました。あまりにもたのしかったものですから、シンデレラはじかんのことなんて、すっかりわすれていました。いまは、十一じくらいかな、とぼんやりおもっていたのです。

するとどうでしょう、十二じのかねがなっているではありませんか。シンデレラはびっくりしてとびあがり、ウサギのようにそそくさにげださなくてはなりませんでした。王子さまはいっしょうけんめいおいかけましたが、シンデレラはもう行ってしまったあとでした。けれど、シンデレラのガラスのくつが、かたほうのこっていました。王子さまはそうろっと、くつをひろいあげました。

シンデレラはいきをきらしながら、なんとかいえへかえれました。服はすっかりもとのぼろにもどっていて、きれいだったあれやこれやは、なにもありません。ただ、おしろでおとした、ガラスのくつのもういっぽうだけが、のこっていました。

そのすぐあと、おしろのもんばんが、

王子さま：だれかおひめさまがぬけださなかったか

ナレーターB：、ときかれました。するともんばんのひとりが、

門番：わかいむすめがひとり、でていきよりました



ナレーターB：とこたえました。

もんぼん

門番：ほいじゃが、ぼろをきとって、おひめさま、いうよりや、まずしいなかのむすめ、いうかんじじゃったです

ナレーターB：と。

やがて、ふたりの姉あねもパーティからかえってきました。シンデレラは、

シンデレラ：たのしかったですか、またあのすてきなおひめさまはいましたか、

ナレーターB：とききました。

ふたりは、

あね あね

姉A&姉B：ええいましたわ、

ナレーターB：とこたえました。

あね

じゅうに

姉A：でも、十二じのかねがなったとき、あわててとびだして行って、あわてすぎて、ガラスのくつをおとしていったのよ、

ナレーターB：と。

あね

おうじ

姉B：とってもかわいいくつで、王子さまがひろったの。だって、パーティのあいだじゅう、ずっと、そのおひめさまのことばかり見ていたんですから、あたりまえのことだけど、

ナレーターB：とつづけました。

そしてさいごに、

あね おうじ

姉B：王子さまは、そのガラスのくつのおひめさまに、ひとめぼれしたにちがいないわ、

ナレーターB：とつづくわえました。

ふたりのいったことは、まったくそのとおりでした。なんにちかたった日のこと、トランペットひがなって、王子さまおうじのことで、おふれがあるといったのです。なんと、そのひろったガラスのくつがあし はい おんなぴったり足に入る女のひとを、王子さまおうじのはなよめにする、というではありませんか。

おうじ

王子さまにいわれたおやくにんは、いろんなおひめさまに、そのくつをはいてもらいました。それからいろんなひとのおくさんや、おしろにいるむすめたちにもはいてもらいましたが、

はい

ぴったり入るひとは、だれもいませんでした。

くつはまわりまわって、シンデレラのいえにもやってきました。姉たちはなんとかしてくつに足あしをおしこもうとしましたが、どうにもこうにもなりませんでした。シンデレラはよこで見みていて、ガラスのくつが、うばからもらったあのくつだということきに気がつきました。そこで、わらいながらいいました。

シンデレラ：「わたしにも、あわないかどうかだけ、たしかめても？」

ふたりの姉はぷっとふきだして、シンデレラをからかいました。でも、くつのもちぬしをさがしているおやくにんは、シンデレラをじっと見つめました。おやくにんは、シンデレラがとてもしかおしい顔かおをしていると、気づいたのです。

そこでおやくにんは、こういいました。

やくにん  
お役人：はいてみんさい、だれにもためしてみい、といわれとりますけえ

ナレーターC：と。

おやくにんは、シンデレラをイスにすわらせ、足あしにくつをあてがうと、するりと入はいってしまいました。まるですべすべにみあしがいたみたいに、シンデレラの足あしに、ぴったり入はいったのです。

ふたりの姉は、びっくりして、なにもことばがで出てきませんでした。でも、つぎのしゅんかん、もっとびっくりしました。シンデレラが、ポケットからもうかたほうのガラスのくつをとりだして、じぶんの足あしにはめたからです。

そこへうばがやってきて、シンデレラのぼろをステッキでちょんとたたきました。シンデレラの服ふくは、みるみるうちに、まえよりもっときれいな服ふくにかわってしまいました。

さすがにふたりも、ダンス・パーティで見たきれいなおひめさまが、シンデレラだったこときに気がつきました。ふたりはシンデレラのまえにひざまづいて、

あね  
姉A：いままでひどいことをたくさんしましたが、

あね あね  
姉A&姉B：どうかゆるしてください、

ナレーターC：とおねがいしました。

けれども、シンデレラはふたりの顔かおをあげさせて、ぎゅっとだきしめました。

そして、こういいました。

シンデレラ：「いいんです、ほんとうに、いいんです。ただ、わたしをいつも好きすでいてくれたら、それだけでいいんです。」

ナレーターC：シンデレラはそのすがたのまま、王子さまのまへへあんないされました。王子さまは、今日のシンデレラが、今までの中でいちばんうつくしい、と思いました。

すうじつご、シンデレラと王子さまはけっこん式をあげました。こころやさしいシンデレラのとりはからいで、ふたりの姉も、おしろでくらせるようになり、シンデレラのけっこんしきとおなじ日に、姉たちもおしろのえらいひとと、けっこんしましたとさ。

---

翻訳の底本：Lang, Andrew (1889) "Cinderella, or the Little Glass Slipper"

上記の翻訳底本は、著作権が失効しています。

2002（平成14）年4月1日初訳

2006（平成18）年4月30日修正

※この翻訳は「クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンス」

（<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>）によって公開されています。

Creative Commons License

翻訳者：大久保ゆう

2014年3月25日作成

青空文庫収録ファイル：

このファイルは、著作権者自らの意思により、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）に収録されています。

\* 訳者に確認の上、一部表記を改めています。